
とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の風勢制御^{プラストマニコープ}

【Nコード】

N4605Z

【作者名】

原石

【あらすじ】

あのパリーな麦野姉さんにもし弟がいたら。そしてその弟が学園都市の第八位で、一歳年上の結標姐さんが幼馴染だったら。そんな特殊な環境で育った主人公が一生懸命生きていくお話です。話は中学二年生から始まります。

第0話 主人公紹介（前書き）

「主人公の能力がチートじゃない小説を書いてみたかった。それだけが望みで……俺はこの小説を書こうと決心したんです」

禁書目録を愛している男

原石

第0話 主人公紹介

麦野^{むぎの} 龍華^{りゅうか}

容姿：ほとんど跳ねが見られない男子にしては長めの黒髪。ツリ目のせいで目つきが悪いが、顔のつくりはかなりマトモ。若干、女顔。

身長：【第1章】 156cm

【第2章以降】 165cm

体重：【第1章】 49kg

【第2章】 52kg

性格：メンドクサガリ屋だが、人を放っておけないお人よし。あまり好戦的ではないが、キレると姉譲りの暴走っぷりを見せる。

能力：風勢制御<ブラストマニューブ>

能力説明：風を掌握するチカラ。自分で風を発生させることも可能。体に風を纏って攻撃もできる。

学園都市の第八位。

顔が少し女顔のため、性別を時々間違われてしまうことを気にしている。

二歳年上の姉が一人いて、一歳年上の幼馴染が一人いる。

第0話 主人公紹介（後書き）

「遅刻遅刻遅刻う！！」

学園都市第八位

麦野龍華

第1話 家に帰るまでが遠足（前書き）

「貴方、そんなものばかり食べていたら早死にするわよ？」

学園都市の大能力者

結標淡希

第1話 家に帰るまでが遠足

『学園都市の能力開発技術は、向上の一途をたどっており、この調子で行けば、強能力者以上の能力者の数を増やすことも可能であると専門家は言い』

学園都市の第7学区にある2LDKのマンションの一室で、毎朝六時半から放送されている報道番組がそんなニュースを、淡々とした口調で視聴者に知らせている。無愛想な表情だが何故か人気がある女子アナウンサーの声だ。

そんなアナウンサーの顔をぼーっと見つめている少年こと、麦野龍華は実姉が毎朝用意してくれる「サクサクツ！チョコ風味メロンパン」をもぎゅもぎゅと食していく。

「ごちそうさん」

メロンパンを食べ終わった龍華は洗面所に移動して歯を磨き始める。低血圧な龍華の表情は、起床から三十分ほど経っている今でもぼーっとのペーっとしていた。

十分ほどかけて歯を磨いた後、学校指定の青いブレザーと黒いズボンをもそもそと着用していく。

そして制服を着終わって顔を水で洗ったことにより覚醒した龍華は薄っぺらい鞆を肩に担いで、

「行ってきまーす」

(家から学校まではそう遠くねえ。この調子ならチャイムぎりぎりには辿りつけるはず……ッ!)

ほら見えてきた。無駄にきれいな白い校舎。無駄にデカくて無駄に生徒数が少ない俺の通っている中学校。校長先生が校門を閉めようとしているけどそうはさせねえ!!

パンパンの足にムチ打ってラストスパートに全てを賭ける。俺に不可能はない!俺は……第四位の弟であり、第八位の超能力者なのだから!

結局、チャイムにはギリギリ間に合った。息も絶え絶えで肩で息をしている俺を見て『だ、大丈夫か……麦野?』と担任が聞いてきたが、俺は満面の笑みで『問題ないっす!!』と答えておいた。人間、笑顔さえあればどんな状況でも乗り切れるもんだ。

んで、四時間目が終わって今は昼休み。俺は昼食を調達するために購買へと向かいますかね。今日はパンでも食うか? いや待て。今日は水曜日だから鮭弁が安く売っているハズ……ッ!!

「そうと決まれば善は急げだな。鮭弁は誰にも渡さねえ!!」

ぐっふっふ。沈姉しんねいですら指をくわえて羨ましがるほどの鮭弁を独り占め……多分他の人も買ってるだろうけど、このクラスでは俺だけで鮭弁を独り占め!! 神よありがとう!!

「待つてる俺の鮭弁たちよ……ぐふえー!!」

頭に走る強烈な痛み。というか痛みよりも先に疑問が俺を支配した。

教室を出ようとしてドアをガラガラッと開けて飛び出そうとしたら、いきなり眉間を鈍器で殴られた。視界にキラキラとした無数の星が見えるのは幻覚だろうか？

「あら？ 龍華じゃない。どうしたのかしら？」

「どうしたのかしら？ じゃねえ!! どう考えても確信犯だろお前!! 出会いがしらに軍用懐中電灯で殴りつけるのは確信犯だろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

猛牛のような叫び声をあげる俺を冷めた目で見つめてくるこの女子生徒の名は結標淡希^{むすじめあわき}。【座標移動^{アップポイント}】という能力を持った大能力者だ。俺の幼馴染で沈姉と犬猿の仲であるヤツ。怒らせたら壁に体を埋め込まれちゃうゾ

そんな淡希にさらなる追撃をかまそうとしたが、俺は鮭弁を買いに行く途中なのだ。こんなところで足止めを食っている暇はない。

「つつーか、今はお前の相手をしてる場合じゃねえんだ!! いざ購買へ!!」

「あー!! ちよっ、待ちなさいったら!!」

「聞こえませーん!!」

淡希が能力を使う前に俺は購買へと猛ダッシュした。

購買で無事に鮭弁を購入した俺は満面の笑みを浮かべて教室へと帰還した。残り三十分ほどのこの休み時間、鮭弁の味を楽しむ時間に費やしてやる！

そんな決意を固めたところで、窓際の俺の席に淡希が座って【健康 爽快サラダ】という市販のサラダの詰め合わせをもぎゅもぎゅと頬張っているところを目撃。

俺はため息を一度ついて前の席に腰を下ろす。

「相変わらずサラダ一筋だなお前。そんなんじゃ早死にすつぞ」

「鮭弁オンリーな貴方にだけは言われたくないわね。野菜も少しは摂らないと」

「バー力。鮭は体にいいんだっつーの。よく言うだろ？ 『魚は頭に良い』って」

「すでにLEVEL5であるあなたにそのキャッチコピーは必要ないんじゃない？ 削板じゃあるまいし」

「軍覇は【原石】だから演算してねえんだ。頭が悪いのも領ける。それに俺は第八位なんていう微妙な立ち位置に対して抗議したいくらいだっつーの」

「そういうところ、沈利さんに似ているわよね。順位なんてどうでもいいでしょうに」

レタスをフォークでグサツ！と突き刺して口へと運ぶ。不覚にもその動きの流れが優雅だと思ってしまったのはココだけの秘密だ。

知られたらこいつは調子に乗る。間違いなえ。

「工業的価値に基づいての順位付けなんて納得できるかよ」

「でも貴方の能力って八人の超能力者の中で、一番地味じゃない」

「気にしていることをズバツと袈裟斬りにしますねアンタは！ もうちよつとオブラートに包むとかできねえの!？」

「ごちそうさま。じゃあ私は教室に戻るから」

「って話を聞けえ!!」

ヒュンツ！ と、淡希は自分自身をレポートさせて教室へと戻っていった。ホントに便利だよな空間移動系の能力って……俺も使ってみたい。

「はあ……次の授業の準備でもしよ」

俺が溜め息を吐くのと五時間目開始のチャイムが鳴るのはほぼ同時だった。

全授業が終了し、帰宅部の学生にとっての楽園パラダイスである放課後がやって来た。

俺は薄っぺらい鞆を持って教室を早足で出る。今日は早く帰って来いって沈姉に言われているからできるだけ早く帰らねえといけな。今は四時二十六分。指定された時間は五時。余裕で間に合う時間だ。少しぐらい寄り道しても文句は言われないだろう。

「コンビニにでも寄ってくかなー」

そうと決まれば何とやら。

俺はいつもの帰宅ルートから右に逸れて、地下街へと入っていく。この地下街は俺のお気に入り、よく沈姉と一緒に飯を食いに来ている。

俺はそこのあるコンビニを目指して大股で早歩き。

『あ。どこのバカが早歩きなんてしているのかと超思えば、龍華じゃないですか』

ココのコンビニには俺と沈姉お気に入り、鮭弁が販売されている。この時間ならまだ余っているはずだし、アレを確保しておけば遅刻しても怒られないで済む。姉の機嫌取りぐらいお手の物なのだ！

『あれ？ 超シカトですか？ この私を超無視ですか？ そうですかマジですか……』

よし、見えてきたぞ例のコンビニ。今日は珍しく人が少ないみてえだな。とりあえず鮭弁を確保して、マンガを一話だけ立ち読みして、それからそれから……予定がどんどん広がっていく！

『もう私超キレましたよ。プツンしましたよ。第八位だとかそんなことは超どオでもいいです。くらえ！ 絹旗ちゃん室素パーンチッ！……』

「げぶるわあ！……」

右頬にいきなり痛みが走ったかと思ったら地下街の壁に猛烈に熱

いキス。一瞬で視界がブラックアウトし、右腕の関節がぎしぎしと痛みを発している。誰かが俺にサブミッションを決めているようだ。「って何すんだ怪力小学生!!」

俺にサブミッションをかけているこの少女の名は絹旗最愛。きぬはたさいあい【室オフエンズアーマー素装甲】という変わった能力を持った大能力者だ。沈姉の知り合いみたいなんだけど、どんな関係で知り合ったかは知らない。

そんな絹旗は額にビキリと青筋を浮かべ、目以外をにこやかにしながら、

「それは超こっちのセリフです!! 何回声かけたと思ってるんですか!？」

「折れる折れる折れるって!! 大能力者の能力フルパワーで人の腕を折ろうとするんじゃないやありません!! 能力を使う時に大事なことはTPO!!」

「それを超見事に今の状況は当てはまっています。とりあえず今は私の怒りを体で超感じてください。大丈夫です。痛みの後は快樂が超待っていますから」

「死!? それは決して体験してはいけない領域じゃね!? つつーか早く家に帰らねえと沈姉にキレられんだよ!!! 責任とれんのか!？」

「それじゃあ尚更家には帰りません。ここで超愉快的死体になりやがれ!!」

ヤベエ。コイツ目がマジだ。俗にいうレイプ目という奴じゃなかるうか。ホントに小学生かコイツ? 凶悪さがすでにヤバ目なライオンなんですけど。

「愉快的死体になりたい人間はこの世にいねえ!! 秘技!!」

第1話 家に帰るまでが遠足（後書き）

「貴方の精神、操っちゃうゾ」

学園都市の超能力者

食蜂操祈

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605z/>

とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

2011年12月15日23時54分発行